

馬鈴薯新品種「ウンゼン」及び「タチバナ」について

宮本健太郎\*・池田 定男\*・宮原 万芳\*\*・松沢 正知\*\*\*

\* 長崎県農業試験場愛野試験地  
 \*\* 農林省東北農業試験場刈野試験地  
 \*\*\* 広島県農業試験場高冷地支場

MIYAMOTO, K., IKEDA, S., MIYAHARA, T., & MATSUZAWA, M.  
 On the New Varieties of Potatoes, Unzen and Tachibana

1. 緒 言

1955年、長崎県農業試験場愛野試験地で馬鈴薯「ウンゼン」及び「タチバナ」を育成し、前者は長崎県(昭和29年)及び広島県(昭和30年)に、後者は長崎県(昭和29年)において奨励品種に採用して普及されるに至つたので、育成の経過及び特性を述べて参考に供する。

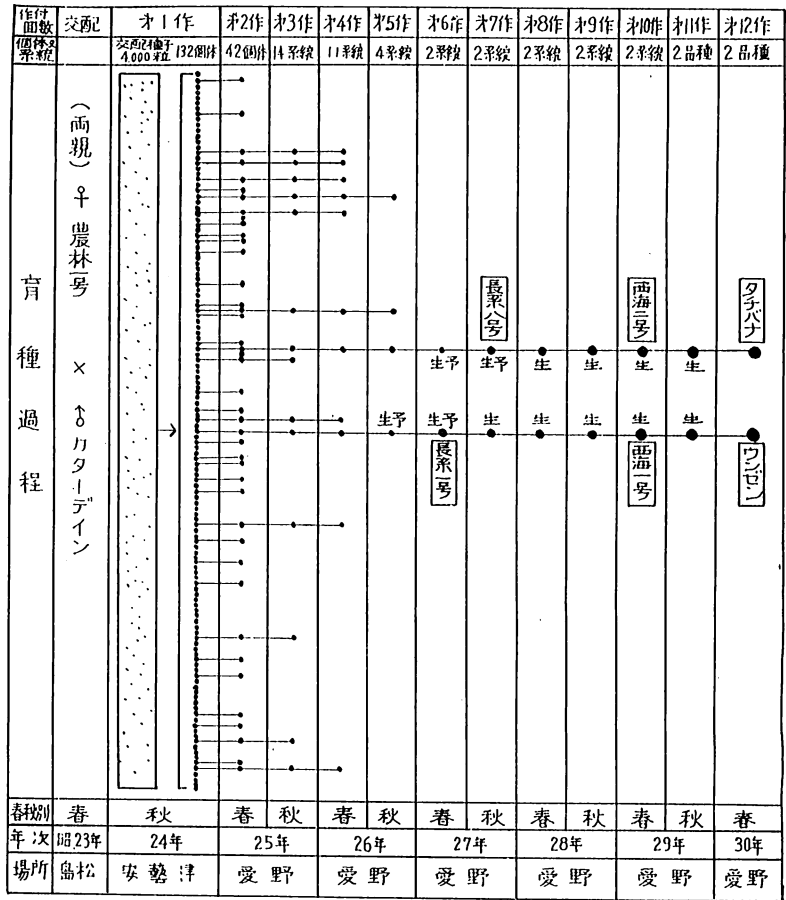
本育成試験の遂行並びに成績の取纏めに当り御懇篤なる御指導を賜つた農林省農業改良局安孫子研究企画官、長崎県農業試験場月川場長、本品種の適応性及び特性検定について御協力を願つた関係各地農業試験場担当官並びに諸調査及び増殖に尽力された当試験地相川技師外職員各位に対し深甚なる謝意を表する。

2. 育成経過

馬鈴薯「ウンゼン」及び「タチバナ」の来歴は第1図に示す通り、昭和23年農林省札幌農事改良試験所高松試験地において「農林1号」を母とし、「カターデイン」を父として人工交配を行い、翌24年3月農林省西

条農事改良試験所安芸津試験地にその種子の配布をうけて同年秋作に発生育成し、昭和25年から農林省佐賀農事改良試験所長崎試験地に移して、昭和26年度から長崎県農業試験場愛野試験地で選抜を重ねてきた二系統である。この二系統の生産力予備検定試験及び

第1図 馬鈴薯「ウンゼン」及び「タチバナ」の育成過程要図(1955年)



註 生子は 生産力予備検定試験  
 生 は 生産力検定試験

本試験に供試した年次は多少前後しているが、昭和 29 年度の春作から「馬鈴薯西海 1 号」及び「馬鈴薯西海 2 号」として地方農業試験研究機関に配布して適否を検定した結果、その成績が優良なため昭和 30 年 5 月「馬鈴薯農林 6 号」及び「馬鈴薯農林 7 号」として登録し、育成地に近い雲仙及び橘湾の地名をとつて「ウンゼン」及び「タチバナ」と命名されたのである。

3. 特 性

「ウンゼン」は中晩生種であるが、「農林 1 号」よりやや早生である。莖長は「農林 1 号」より短くて、莖は

太く、莖数は少ない。葉色はやや淡く、葉面は滑らかである。花は白色で開花数はあまり多くないが、稀に自然結実をする。叢性はやや開いて葉柄が長いために枝葉は疎に感じられる。匍枝は短く、薯は大型の扁円形で皮色は僅かに淡褐色をおびた黄白色で目はやや浅い。休眠期間は短くて「農林 1 号」と殆ど同じ程度である。澱粉価は「農林 1 号」よりやや低いが「チトセ」とほぼ同じである。疫病抵抗性は「農林 1 号」より若干弱く、ウイルス病に対しては強いが、葉捲病にかかる嫌がある。瘡痂病には「農林 1 号」より強く二次生長はあまりみない。食味は中の上位で食用種として優

第 1 表 馬鈴薯「ウンゼン」及び「タチバナ」の特性一覽表 (1954 年)

項目 品種名	莖色	葉色	草 状	花 色	花 数 の 多 少	塊 莖						食 味	休眠日数	
						大 小	形 状	皮 色	目 の 深 浅	目 の 多 少	肉 色		春 作 産	秋 作 産
ウンゼン	淡赤紫	中	良	白	少	大	扁 円	淡黄褐	中	中	白	中 上	77日	119日
タチバナ	緑	稍濃	良	白	多	大	楕 円	淡黄白	浅	中	白	中 上	74日	115日
男 爵 薯	淡紫	稍濃	良	淡紫白	中多	中	球 形	淡黄白	稍深	中	白	上 下	102日	135日
農 林 1 号	淡紫	稍濃 中	良	白	中	中	扁 円	淡黄褐	稍深	少	白	中 上	78日	119日

第 2 表 馬鈴薯「ウンゼン」の上薯重及び澱粉價 (1952~54 年)

項目 品種名	期	反 当 上 薯 重					澱 粉 價			
		昭27年	28 年	29 年	平 均	標準比	27 年	28 年	29 年	平 均
ウ ン ゼ ン	春	712.9	680.1	772.9	721.9	121	14.9	13.2	14.5	14.2
	秋	706.6	704.1	603.7	671.4	102	14.6	15.6	15.3	15.2
男 爵 薯	春	491.5	395.8	361.9	416.4	70	12.6	11.3	14.2	12.7
	秋	589.8	236.1	339.8	388.6	59	15.9	14.2	16.2	15.4
農 林 1 号	春	529.4	583.1	675.0	595.8	100	14.9	13.7	15.5	14.7
	秋	693.6	662.0	610.8	655.5	100	16.9	17.5	17.7	17.4

註. 昭 27 年 春 作 生産力予備検定 2 作目  
同 秋作以降 生産力検定試験

第3表 疫病抵抗性検定試験成績(1954年)

品種名	春秋 区別		秋 作	
	A	B	A	B
ウンゼン	15.0	2.5	微	微~少
タチバナ	17.5	2.5	微	少
農林1号	13.8	5.0	微	少

註. A無撒布区

B 撒布区(4斗式ボルドー液反当6~10斗宛  
4回撒布)

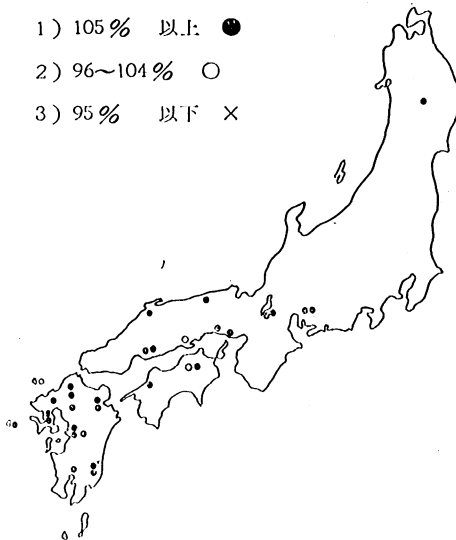
地の「農林1号」に代りうる多収性の春・秋二期作種であつて、特に春作向きとして優れている。(第2図参照)

「タチバナ」は中晩生種に属し「農林1号」より多少晩生である。莖長はやや高くて莖性は直立し、葉は緑色で消色がなく太くて、一見強剛のようであるが、強風にはやや脆くて折損する種がある。葉色は「農林1号」より濃く、葉形は広大で葉面は滑かである。花は白色で極めて多く自然結願しやすい特性がある。薯は長味のある楕円形の淡黄白色で目は浅くて外観は優美で極めて良好である。匍枝は春作では長いが秋作では中程度になる。大・中粒薯が多くて屑薯は少く粒揃は良好である。薯収量は春作にあつては秋種の「男爵薯」や「チトセ」には優るが「農林1号」よりやや劣る。秋作においては「農林1号」より約2割増収する。休眠期間

第2図 馬鈴薯「ウンゼン」の各地における春作試作成績(1952~54年)

各符号は比較品種農林1号に対する収量比率を示す。

- 1) 105% 以上 ●  
2) 96~104% ○  
3) 95% 以下 ×



は春・秋両薯ともに「農林1号」より数日短い。澱粉価は低いが食味は中の上位である。青枯病には「ホイラ」より強く(第6表参照)、疫病には若干弱い種があるがウイルス病に強く葉捲病は殆どみられない。

## 4. 摘 要

「ウンゼン」は豊産性で春・秋二期作地帯及び寒高冷

第4表 馬鈴薯「タチバナ」の上薯重及び澱粉價(1952~54年)

品種名	項目 期	反 当 上 薯 重					澱 粉 價			
		昭27年	28年	29年	平均	標準比	27年	28年	29年	平均
タチバナ	春	616.4	483.1	714.2	604.6	97	10.7	10.4	13.5	11.5
	秋	917.7	746.1	775.9	813.2	117	14.2	15.1	16.6	15.3
男爵薯	春	346.0	395.8	361.9	367.9	59	10.7	11.3	14.2	12.1
	秋	638.8	236.1	339.8	404.9	58	16.2	14.2	16.2	15.5
農林1号	春	603.5	583.1	675.0	620.5	100	14.4	13.7	15.5	14.5
	秋	797.8	662.0	610.8	696.2	100	17.1	17.5	17.7	17.4

註 昭27年 春 作 生産力予備検定1作目  
同 秋 作 生産力予備検定2作目  
昭28年 春作以降 生産力検定試験

[ 4 ] 宮本・池田・宮原・松沢：馬鈴薯新品種「ウンゼン」及び「タチバナ」について

第5表 青枯病抵抗性検定試験成績  
(1951~54年)

品種名	年次		27年		28年		29年	
	春	秋	春	秋	春	秋	春	秋
ウンゼン	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
タチバナ	0	0	0	0	0	0	0	0
ホイラ	0	66.5	0	6.6	0	35.2	0	0
農林1号	0	0	0	0	0	0	0	0

第6表 食味調査成績 (1953~54年)

品種名	年次		29年		備考
	秋	春	秋		
ウンゼン	7.1	中上	4.9	5.3	
タチバナ	7.1	中上	4.5	3.6	
ホイラ	6.6	下	3.0	3.0	
農林1号	7.5	中上	5.0	5.0	

- 註 1. 蒸シ薯についての食味  
 2. 1953年は10点満点  
 154年は農林1号を5.0として採点

地の春作地帯の広範な地域において肥沃な軽鬆土に好適するが、比較的度地でもかなりの生産性を示す。澱粉価は高くないが食用種として暖地の「農林1号」に代りうるものと考えられる。

「タチバナ」は秋作及び冬作栽培において極めて豊産性で、薯の目は浅くて外貌は優美で蔬菜用種として肥沃な軽鬆土に好適する。澱粉価は低く春作の収量は低位であるが早稲水稲跡作などの秋作用種として期待されるものである。

暖地の馬鈴薯栽培において、特に秋作馬鈴薯はここ数年間にその栽培面積が著しい増加を示している。この原因は「農林1号」等暖地向きの新品種が育成されて、その栽培が容易になつたこと、馬鈴薯は颶風等の災害回避性が可成り強い作物であること、及び今大きく伸びようとしている早稲水稲跡作物として好適していること等によるものようである。而して、このように秋作馬鈴薯栽培面積の漸増しつつある際に、新しく暖地向き品種として育成した「ウンゼン」及び「タチバナ」が今広くかつ末永く暖地における馬鈴薯栽培並びに農業経営上に寄与することを期待する次第である。